

世田谷パブリックシアター×ラファエル・ポワテル(フランス)

## 『フィアース5』第3回報告書〈成果発表〉

呉宮百合香

「七転び八起き」—— 演出家ラファエル・ポワテルが偶然に本で見つけたこの日本のことわざが、『フィアース5』の着想の源となっている。サーカスアーティストたちは日々練習を重ね、何度滑って落ちて転んでも、根気強く挑み続ける。彼らにとってタイトロープ、リング、ストラップ、ポールといった器具は、情熱を注ぐ対象であると同時に苦しみ之源でもあり、そこには究極の愛憎関係がある。共演する仲間と支え合いながら自らの器具と向き合い、困難を克服し、ついには皆で成功に到達する。

本作は、そのようなサーカスの世界へのオマージュであると同時に、人生のメタファーでもある。粘り強さ、勇気、連帯をもって不可能を可能にしようとするサーカスが体現する価値観は、観る者に向けた普遍的な希望のメッセージともなっているのである。

本稿では、10月9日から11日にかけて行われた成果発表について報告する。全3回公演で、報告者は1日目(9日15時)と3日目(11日19時)を鑑賞した。

### 公演について

本番日の朝は、まず前日のパフォーマンスの振り返りから始まる。スタッフ含め全員舞台上に集合し、演出のラファエル・ポワテルからのノートを聞き、確認事項を洗い出す。そのまま舞台上で実際に動きながらいくつかの場面を確認し、一致団結が肝の「スパイダー」の場面も1回通してコンディションを確かめてから、個々の作業に移っていく。

開演45分前、アーティスト・スタッフ全員でプリセット確認。開演15分前、楽屋共有スペースに全員集合し、円陣を組んで連帯を確認。そして、幕が開く。

1日目は、土曜の昼公演ということもあって子ども連れが多く、一挙手一投足にダイレクトな反応があった。秩序整然としたプロローグ、続く場面では無音のなかのコミカルなやり取りにさっそく笑いが漏れる。中盤の演技中心のグループシーンがやや散漫としたものの、終盤に向けて持ち直し、作品のクライマックスでは高い集中力と一体感が観客を引き込んだ。全体としては正確でリズムカルな場面展開で、出演者ひとりひとりが際立って見えた。ただし演技に関しては硬さが残っており、特に各自のソロシーンは、テンポが良すぎるあまり動きに感情が乗る間がなくなっているような印象を受けた。

千秋楽となる3日目は、満員になった客席にも舞台にも冒頭から高揚感があった。動き・音楽・照明がぴったりとかみ合ったことで演出の意図が明確になり、劇的効果が増幅した。そして何より個々人が輝いており、作品世界を晴れやかに等身大で生きるその姿に目を惹きつけられる。技術的には多少のミスもあったが、それが気にならないほど強度ある世界観が立ち上がっていた。本作には、原則として台詞はない。にもかかわらず、賑やかな「会話」がそこかしこから聞こえるように感じられるから面白い。さらに時折出演者が漏らす生の声や叫びが、意味を超えて観る者を掴み、舞台と客席の距離を近づける。作品終盤、宙吊り状態でもがきあがっていた皆川まゆむがついに嵐を脱して、仲間から差し出されたロープをよすがに高みにのぼっていく場面では、涙する観客が少なからず見られた。

両日も拍手は鳴り止まず、特に3日目はスタンディングオベーションも起こった。最終公演の3回目のカーテンコールの後に、ポワテルは観客に向け

てこのプロジェクトに寄せる想いを語った。マイクも原稿もなく日本語を交えながら真摯に話すその姿に、一層盛大な拍手が送られた。



作品のクライマックスとなる「スパイダー」の場面(撮影:片岡陽太)

### 作品選択への評価

『5es Hurlants』(2015)の日本版を制作するという企画は、もともとラファエル・ポワテルの発案によるものだという。カンパニー・ルーブリエを立ち上げてから3作目、大規模なクリエイションとしては2作目にあたる本作を、企画制作の酒井淳美は「世界から注目を集めるきっかけになった作品であり、彼女の自信作」と評する。事実、本作にはカンパニー・ルーブリエの特徴——ダンス・演劇・映画・サーカスの語彙を混ぜ合わせた豊かな振付言語、舞台機構や装置自体を美しく有機的に見せる唯一無二の演出、人と人との関係をエモーションに描き出す手つき——が凝縮されている。2019年に来日公演を果たした『When Angels Fall/地上の天使たち』と比べると演出構成がシンプルで、若い世代の育成を目的とするリクリエイションの題材としてはうってつけだ。

その一方で、技術面でもキャラクター設定の面でもオリジナルキャストのカラーが色濃く反映されている作品で、日本版キャストに合わせて削り変える時間もあまり取れなかったため、演出的に無理が生じた部分があることは否めない。特に技術面に関しては、5名中2名がこれまであまり経験のない器具を扱うこととなり、かなりの冒険となった。キャラクター面に関しては皆面白がって取り組んでおり、最終日には各人の持ち味も加わったリアルな表現が立ち現れていた。いわゆるボックスステージのものであるという点も、親しみをもちやすかった理由かもしれない。

ダンスの要素や演劇的要素などを取り込みながら多様に発展する現代サーカスの可能性を示すという観点からも、若きサーカスアーティストたちの成長譚という直球のストーリーは有効に機能していたように思われる。本作のエピローグで、出演者たちは昔ながらのサーカスの衣裳に着替え、全員で円陣を組んでから、舞台上に円形に置かれた椅子に腰掛ける。5着の年代物の衣裳は全て、歴史あるサーカス一家に育った女性初のクラウンにして、フランス初の国立サーカス学校の創設者、そして幼いポワテルを見出しサーカスの道へと誘ったアニー・フラテリーニから本作のために借り受けたものだ。伝統サーカスとの接続を見せるこの場面を作品の最後に配することによって、歴史に大きな敬意を表するとともに、創造的な舞台芸術となった現代サーカスの特質を浮き彫りにすることに成功していた。

ポワテルは、本作を選んだ自分の判断自体にコロナ禍の影響があるかもしれないと振り返り、大きなストレスを抱えた人々の間に悲観主義や分断が広がっている今こそ、この作品のメッセージが必要なのではないかと感じたと語る。まさにその象徴となっているのが、専門の違いを超えて皆で手を携え実現

する「スパイダー」の場面だ。身体的にも精神的にも極限まで追い詰められながらも、力を振り絞って助け合い、最後は全員で危機的状況を乗り越える姿は、観る者にも強い感情を呼び起こす。

私たちがここで発信するメッセージは、もしかしたら小さいものなのかもしれない。私たちは小さい存在、小さい作品かもしれませんが、この世の中で生きていくために、私はこのメッセージが必要だと思っています。——ポストトークでの発言より(2021年10月10日)

今の世界の状況、そして様々な制約のなかで「七転び八起き」して本番を迎えた本プロジェクトの経緯と重なることで、作品が元来持つメッセージは一層強度を持って観客に届けられることになった。その点からも、作品の選択は時宜にかなったものであったと評価できる。



伝統サーカスの衣裳を身につけ円陣を組むエピローグ(撮影:片岡陽太)

### 到達度への評価

本作には、技術スタッフとの緊密なコラボレーションからなる演出、各自の専門技術を見せるソロアクトよりもグループワークが多い構成、基礎的な身体性を共有することを重視する振付など、日本の作品にはしばしば不足しがちであった要素が詰まっている。しかしながらアーティスト育成の環境もプロダクションのあり方もフランスとは全く異なるなかで、これらを実現していくことは容易ではなかった。なかには取捨選択の末、今回は削らざるを得なかった要素もある。

### 身体言語の共有

本作には、それぞれの専門技術の高さ以上に、立つ・歩くといった舞台上での佇まいや、ダンス的要素を伴うグループワークへの対応能力を問う場面が多いが、これにはフランスのアカデミックな養成システムのあり方が少なからず反映されていると考えられる。実際、オリジナル版のメインキャストは全員アカデミー・フラテリーニ(フランスで最初の国立サーカス学校)出身であり、前提としてある程度の共通経験を有している。対して養成システムが確立しておらず、人によって積んできたトレーニングが異なる日本でこのような作品創作を行う場合は、まず共通の身体的基盤を構築することから始める必要がある。コロナ禍による稽古のリモート化で、基礎的な身体性を育むエクササイズの時間がほとんど取れなかったことは惜まれる。今回は各人が培ってきたスキルに頼る形となったが、今後出演者間で身体言語が共有されていけば、一層の質向上が見込めるだろう。

### アーティストの個性に合わせた演出や振付のカスタマイズ

段取りを全てクリアにし、作品を完成させることだけで手一杯で、出演者の個性に応じて演出や振付に手を加えるところまでは行き着かなかった。この結果から考えると、オリジナル版と全て同じ器具を使用することにしてお

いたのは現実的な判断であったかもしれない。慣れない器具の使用は出演者にとっては負担が大きかったが、一方で映像をもとに自習ができるというメリットもあった。

### ソロナンバーの練習時間

グループワークの稽古に多くの時間を割いたため、ソロナンバーの練習時間が削られ、ディテールがやや甘くなった面がある。いずれのソロも高度な技の連続であるため、実際の舞台環境で練習して強烈な光や闇にも慣れる必要がある。今回は、本番間際にソロナンバーの精度を上げる時間が取れなかった。

とはいえ厳しいスケジュールを考慮して、このような「選択と集中」を行ったのは英断であったと思われる。その結果、本公演が十分に成立するクオリティまで短期間で持っていくことができた。

もともとはジャグリングやスラックワイヤーが得意分野の吉川健斗は、オーディションからわずか5か月で、難易度の高いタイトロープの技術を習得する驚異的な成長を見せた。その他にも、コントーションистの杉本峻がストラップに挑み、ジャグラーの目黒陽介がロープを操り、ダンサーの皆川まゆむがハーネスをつけるなど、8名の参加アーティストそれぞれが既知の範囲を超えた事柄に挑戦しており、クリエイションのプロセスがある意味で『フィアース5』そのものとなった。

身体的・技術的負荷が高く、さらにタルクによる床の滑り具合など予測できない要素も絡んでくる本作を安定的に上演するには、体力面含め高度で繊細な調整が求められる。日々のコンディション変化や不測のトラブルにも対応しながら、正確な技術と豊かなエモーションを常に両立させる術を体得するには、場数を踏むことが必要なのである。

舞台稽古が始まってからの1週間で作品は目覚ましい進歩を見せ、千秋楽でついに全てのピースがあるべき所にはまった感があった。この東京公演を第一歩として、本作が再演を重ねていく流れが生まれることを強く期待したい。



吉川健斗のタイトロープ(撮影:大洞博晴)



目黒陽介のジャグリング(撮影:大洞博晴)



皆川まゆむのダンス(撮影:大洞博晴)



杉本峻のエアリアル・ストラップ(撮影:大洞博晴)



長谷川愛美のエアリアル・リング(撮影:大洞博晴)



山本浩伸(撮影:片岡陽太)



安本亜佐美(写真中央)(撮影:片岡陽太)